若者のLINE既読無視や未読無視に対する気分状態について
―受け手の愛着形成と送り手に対する好意との関連―

Reaciton of young people toward LINE messagings :
disregarding LINE messages altogether,
not responding even after reading the messages

米沢　美冴
跡見学園女子大学
人文科学研究科　臨床心理学専攻
Misae Yonezawa
Graduate School of Humanities
Division of Clinical Psychology

要　約

近年，10代，20代のインターネット利用率，中でも，ソーシャルメディアのひとつであるLINEの利用率が上昇している。LINEには便利な機能が備わっている一方で，「既読無視」や「未読無視」によるLINEいじめや不登校などの問題が生じている。そこで本研究ではLINEの既読無視や未読無視に対してどのような気分状態が生じるかについて，また受け手の愛着形成や送り手に対する好意との関連についても検討することを目的に，関東圏内の女子大学１年～２年生189名を対象に，フェイスシート，POMS２成人用短縮版，内的作業モデル尺度，日本語版Love-Liking尺度からなる質問紙調査を行い，記述統計，相関分析，一要因の分散分析を行った。その結果，LINE既読無視，未読無視をされた際に感じる感情と愛着とは関連がみられないこと。「どちらも不快に思わない」と答えた回答者より，「既読無視をされた方が不快」または「未読無視をされた方が不快」と答えた回答者のほうがPOMS２のネガティブな感情５因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」を感じやすいことが明らかとなった。

キーワード：LINE，既読無視，未読無視，気分状態，愛着，好意

Ⅰ．問題と目的

１．近年のソーシャルメディアの利用について

近年，インターネットの普及によって，青少年をとりまく日常生活のメディア環境は大きく変化してきた。2015年末における個人の年齢階層別インターネット利用率は，13歳～59歳までは各階層で９割を超えていて，世代別６-12歳では74.8%であるのに対し，13-19歳では98.2%と大幅に上昇している（総務省，2016）。

また，中でもソーシャルメディアのひとつであるLINEの利用率が上昇している。

LINEには「既読」や「スタンプ」，「ブ

ロック」,「グループトーク」,「招待・退会」などといった便利な機能が備わっている（旭LINE同盟ら，2015）。

「既読」とは，送ったメッセージを相手が読んだかどうかわかるサインのことを指す。

その一方で「既読無視」や「未読無視」,「グループ外し」などによるトラブルによりいじめや不登校が発生することがあり，最悪自殺に追い込まれるようなケースもある。

旭LINE同盟ら（2015）によると「既読無視」はある人の書き込みに対して，既読だけつけて返信しないものを指す。

「未読無視」はある人の書き込みに対して，既読すらつけないものを指す。要するに完全に無視されたということになる。

LINEの既読表示機能に関する基礎調査（加藤，2016）によると，LINEの既読無視と未読無視ではどちらがより不快であるかを二者択一で尋ねた結果，既読無視を選択した参加者の割合（53.7%）の方が大きいものの，未読無視の割合（43.9%）と大きな差は見られなかったため，既読無視をより不快だと思う人も未読無視をより不快だと思う人も同程度いるということがわかっている。

ネットいじめは平成29年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（文部科学省，2018）による，いじめの項目のうちの「いじめの態様のうちパソコンや携帯電話等を使ったいじめ」に相当し，平成29年度は12,632件で前年の10,779件に比べ増加している。いじめの認知件数に占める割合は3.0%となっている。

2．愛着と情動制御について

愛着理論（Bowlby，1969，1973，1980）では，情動制御の個人差は，乳幼児期からの愛着関係に内在する情動経験の質に由来すると考える。

愛着の個人差に関する研究は，Ainsworth, Blehar, Waters & Wall（1978）によってストレンジ・シチュエーション法が開発されて以来，盛んに行われてきた。そこでは，乳幼児の愛着の個人差に，親との愛着関係が安定している安定型，親との愛着関係が不安定である回避型，両価型の３つのタイプがあることが確認されてきた。その後，発達心理学の領域ではMain & Goldwin（1985–1999）によって，また社会心理学の領域では主としてHazan & Shaver（1987）によって，乳児の３つの愛着タイプに相当する愛着スタイルを，成人にも想定できることが確認されてきた。

坂上，菅沼（2001）によると，代表的な４情動（怒り，悲しみ，恐れ，喜び）に対して，個人が意識の上でどのような態度や備えを有しているか測る尺度と愛着に関する尺度（成人版愛着スタイル尺度）との関連を調べた結果，愛着の安定性の高い人は自他の悲しみや喜びに対する内省や覚知が高く，回避性の強い人は，喜びや悲しみに対する不快感が高い傾向があり，両価性の高い人は，自他の怒り，喜びの覚知が低い傾向があったことがわかっている。

3．仮説

そこで本研究では以下の仮説を検証することを目的とする。

１）既読無視や未読無視の体験によって，ネガティブな感情（不快感や怒りなど）

が生じる。

2）その感じやすさと愛着の状態に関連がある。

Ⅱ．方法

1．調査対象者

関東圏内の女子大学1年～2年生189名（女性，平均年齢18.32歳，標準偏差2.53歳）を対象とした。調査開始時に口頭で概要について説明した。調査開始時に口頭で概要について説明し，同意を得た。質問紙への回答と提出をもって調査協力への同意とみなした。

2．調査時期

2018年6月22日の大学の講義後に実施し終了後に回収した。

3．質問紙の内容

1）フェイスシート

学年，学科，年齢，スマートフォンの有無やLINEの使用頻度，使用時期，既読無視や未読無視の経験の有無，またどちらがより不快に思われるかについて回答を求めた。

2）POMS 2（Profile of Mood States 2ndEdition； Heuchert, J.P., & McNair, D.M.）日本語版成人用短縮版（横山訳，2015）

「怒り－敵意」（『怒る』など5項目），「混乱－当惑」（『とほうに暮れる』など5項目），「抑うつ－落込み」（『悲しい』など5項目），「疲労－無気力」（『つかれた』など5項目），「緊張－不安」（『不安だ』など5項目），「活気－活力」（『生き生きする』など5項目），「友好」（『他人を信頼する』など5項目）の7下位尺度からなる。全35項目。5件法。「既読無視をされた時」「未読無視をされた時」，それぞれの場面を想定してもらい，回答していただく。また，「既読無視をされた時」「未読無視をされた時」の順序はランダムになるようにカウンターバランスする。信頼性の検討についてはα係数が「怒り－敵意」.91，「混乱－当惑」.84，「抑うつ－落込み」.87，「疲労－無気力」.90，「緊張－不安」.89，「活気－活力」.83，「友好」.82となっており，十分な信頼性を持っている。妥当性についてはPOMS 2　2-A，POMS 2　2-Yの全項目版を実施し，そこから得点を抽出し，POMS 2短縮版の判別的妥当性の分析が行われ，証明されている。

3）内的作業モデル尺度（戸田，1988）

成人の内的作業モデル（Internal Working Models）の質を評価するための尺度である。安定尺度」（『私は知り合いができやすい方だ』など6項目），「回避尺度」（『自分を信用できないことがよくある』など6項目），「アンビバレント尺度型」（『あまり人と親しくなるのは好きではない』など6項目）の3下位尺度からなる。全18項目。6件法。信頼性についてはα係数が回避尺度.60，安定尺度.86，アンビバレント尺度.73で，回避尺度がやや低めではあるが，その他の尺度では十分な信頼性を持っている。妥当性については詫摩・戸田（1988）により，併存的妥当性を得ている。

4）日本語版Love-Liking尺度（藤原・黒川・秋月，1983）

ルビンによって開発されたlove尺度とliking尺度の日本語版で，2下位尺度，全26項目からなる。9件法。そのうちlove尺度（全13項目）を利用する。「××さんのためなら，ほとんど何でもしてあげるつもりだ。」，「××さんと一緒にいられなければ，私はひどく悲しくなる。」などの項目から成り立っている。その際イニシャルや年齢を記入させ，特定の相手を思い浮かべやすくする。信頼性についてはα係数を算出し，Love尺度（α＝.90）Liking尺度（α＝.80）と，ともに高い内的整合性が確認されている。妥当性については26の項目の各得点が尺度得点と相関が高いか検討する方法（I-T相関）などにより検証されている。

4．倫理的配慮

本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会において承認を得た（承認番号18-010）。

Ⅲ．結果

1．記述統計の結果

1）フェイスシート

現在のスマートフォンの有無については「持っている」と答えた回答者が176名（93.6%）を占めていた。スマートフォンを持ち始めた時期については，「中学生になってから」持ち始めた回答者が87名（48.6%）と最も多く，続いて「高校生になってから」持ち始めた回答者が71名（39.7%）となっていた。

LINEの使用については，「使っている」と答えた回答者が185名（98.4%）を占めていた。

LINEを使用し始めた時期については，「中学生になってから」LINEを使用し始めた回答者が104名（56.5%）と最も多く，続いて「高校生になってから」LINEを使用し始めた回答者が72名（39.1%）となっていた。

現在のLINEの使用頻度については「通知に気づいたとき」と答えた回答者が87名（47.3%）と最も多く，続いて「暇になったとき」と答えた回答者は56名（30.4%）であった。

LINEで既読無視や未読無視の経験の有無については，「両方ともされた経験がある」と答えた回答者は164名（88.6%）となっていた。

「両方ともされた経験がある」と答えた回答者のうち，80名（50.0%）の回答者が「どちらも不快に思わない」ということが明らかとなり，「既読無視をされると不快に思う」回答者が43名（26.9%），「未読無視をされると不快に思う」回答者が37名（23.1%）となっていた。

2）各尺度下位尺度得点の平均値と標準偏差

各下位尺度得点の平均値と標準偏差はTable 1の通りであった。

3）既読無視または未読無視をされた際に感じるPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」と各尺度下位尺度得点との相関について

Table 1　POMS 2 の尺度得点

	n	平均値	標準偏差
怒り・敵意【既読】	188	2.68	3.76
混乱・当惑【既読】	188	1.93	3.40
抑うつ・落込み【既読】	188	2.15	3.37
疲労・無気力【既読】	188	1.63	3.40
緊張・不安【既読】	188	2.45	3.55
活気・活動【既読】	188	.98	2.55
友好【既読】	187	.99	2.63
怒り・敵意【未読】	188	2.38	3.42
混乱・当惑【未読】	188	1.59	2.90
抑うつ・落込み【未読】	188	1.83	2.96
疲労・無気力【未読】	188	1.58	3.60
緊張・不安【未読】	188	2.17	3.26
活気・活動【未読】	188	.66	2.39
友好【未読】	188	.95	2.47
安定型	184	18.49	5.59
アンビバレント型	188	21.41	5.73
回避型	187	17.93	5.10
Love尺度	173	61.83	21.45

既読無視をされた際と未読無視をされた際，それぞれの場面で感じたPOMS 2 のネガティブな感情5因子（「怒り・敵意」，「混乱・当惑」，「抑うつ・落込み」，「疲労・無気力」，「緊張・不安」）と内的作業モデル尺度とLove尺度との相関係数を算出したところ，既読無視をされた際に感じる「緊張・不安」は内的作業モデル尺度の「アンビバレント型」因子とほぼ相関が認められなかった。既読無視をされた際に感じるその他のネガティブな感情因子と，内的作業モデル尺度のその他の因子と，Love尺度とでは有意な相関は示されなかった。

未読無視をされた際に感じるネガティブな感情因子に関しても，内的作業モデル尺度の因子とLove尺度との有意な相関は示されなかった。

2．1要因の分散分析

1）LINEの使用頻度別

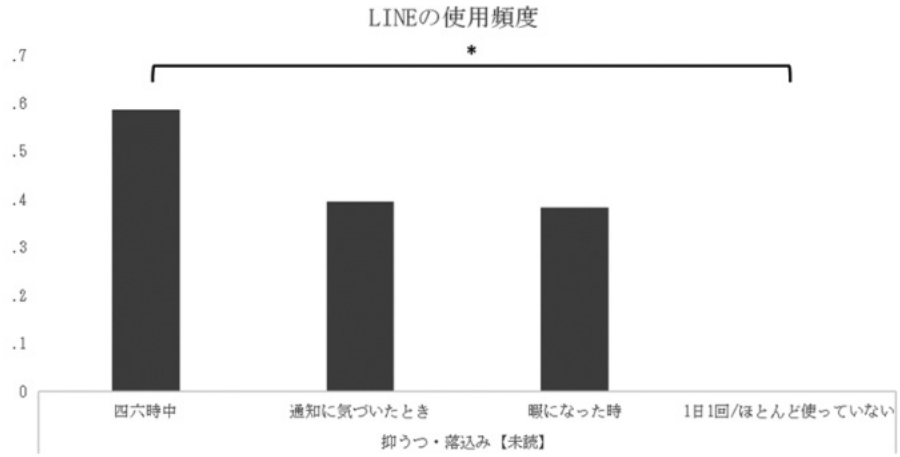
LINEの使用頻度について，回答数の少なかった「1日1回」と「ほとんど使っていない」の項目を合体させ，「使用頻度最少群」とし，「四六時中」，「通知に気づいたとき」，「暇になったとき」，「使用頻度最少群」の4群とした。

既読無視または未読無視をされた際に感じるPOMS 2 のネガティブな感情5因子とLINEの使用頻度とで平均値の差の検定を行ったところ，未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」（$F(3, 149) = 2.77$，$p < .05$）において，有意水準5％で有意な差がみられた。多重比較（Tukey法）を行った結果，未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」において，LINEの使用頻度の「四六時中」の得点が，「使用頻度最少群」の得点より，有意水準5％で有意に高いことが明らかとなった（Figure 1）。

また未読無視をされた際に感じる「疲労・無気力」（$F(3, 179) = 3.45$，$p < .05$）において，有意水準5％で有意な差がみられた。多重比較（Tukey法）を行った結果，未読無視をされた際に感じる「疲労・無気力」において，LINEの使用頻度の「四六時中」の得点が，「使用頻度最少群」の得点より，有意水準5％で有意に高いことが明らかとなった（Figure 2）。

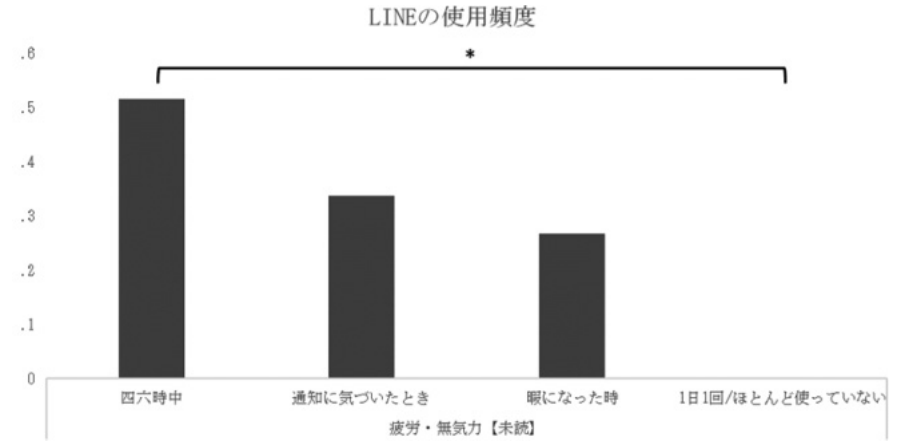
2）既読無視または未読無視をされた際にどちらをより不快に思うか，またはどちらも不快に思わないかについて

既読無視または未読無視をされた際に感じるPOMS 2 のネガティブな感情5因子と



＊p＜.05

Figure 1　未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」の平均値



＊p＜.05

Figure 2　未読無視をされた際に感じる「疲労・無気力」の平均値

既読無視と未読無視を不快に思うかどうかの項目とで平均値の差の検定を行ったところ，既読無視をされた際に感じるネガティブな感情「怒り・敵意」(F(2,107)＝35.46，p＜.001)，「混乱・当惑」(F(2,140)＝9.05，p＜.001)，「抑うつ・落込み」(F(2,110)＝24.49，p＜.001)，「疲労・無気力」(F(2,156)＝11.34，p＜.001)，「緊張・不安」(F(2,110)＝22.33，p＜.001) の得点において，有意水準0.1%で有意な差がみられた（Table 2）。

さらに未読無視をされた際に感じるネガティブな感情「怒り・敵意」(F(2,107)＝35.51，p＜.001)，「混乱・当惑」(F(2,144)＝8.44，p＜.001)，「抑うつ・落込み」(F(2,130)＝17.76，p＜.001)，「疲労・無気力」(F(2,157)＝13.70，p＜.001)，「緊張・不安」(F(2,105)＝14.44，p＜.001) の得点において，有意水準0.1%で有意な差がみられた（Table 2）。

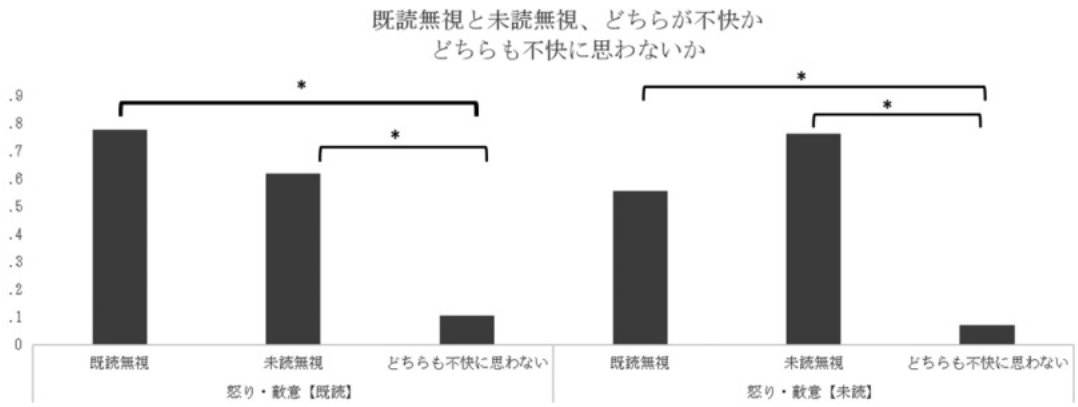
Table 2　既読無視または未読無視をされた際に感じるPOMS 2のネガティブな感情5因子と既読無視と未読無視を不快に思うかどうか（既読無視の方がより不快，未読無視の方がより不快，どちらとも不快に思わない）の項目との1要因の分散分析

		n	平均値	標準偏差	F値	多重比較
怒り・敵意【既読】	①既読無視の方がより不快	31	.77	.43	35.46***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	21	.62	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	58	.10	.31		
混乱・当惑【既読】	①既読無視の方がより不快	40	.55	.50	9.05***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	32	.41	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	71	.18	.39		
抑うつ・落込み【既読】	①既読無視の方がより不快	32	.66	.48	24.49***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	23	.61	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	58	.10	.31		
疲労・無気力【既読】	①既読無視の方がより不快	42	.52	.51	11.34***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	37	.41	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	80	.15	.36		
緊張・不安【既読】	①既読無視の方がより不快	29	.79	.41	22.33***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	26	.62	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	58	.19	.40		
怒り・敵意【未読】	①既読無視の方がより不快	27	.56	.51	35.51***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	25	.76	.44		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	58	.07	.26		
混乱・当惑【未読】	①既読無視の方がより不快	40	.48	.51	8.48***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	36	.47	.51		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	71	.17	.38		
抑うつ・落込み【未読】	①既読無視の方がより不快	36	.56	.50	17.76***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	30	.70	.47		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	67	.18	.39		
疲労・無気力【未読】	①既読無視の方がより不快	43	.44	.50	13.70***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	37	.57	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	80	.15	.36		
緊張・不安【未読】	①既読無視の方がより不快	26	.65	.49	14.44***	①>③*
	②未読無視の方がより不快	25	.60	.50		②>③*
	③どちらとも不快に思わない	57	.18	.38		

***p<.001　**p<.01　*p<.05

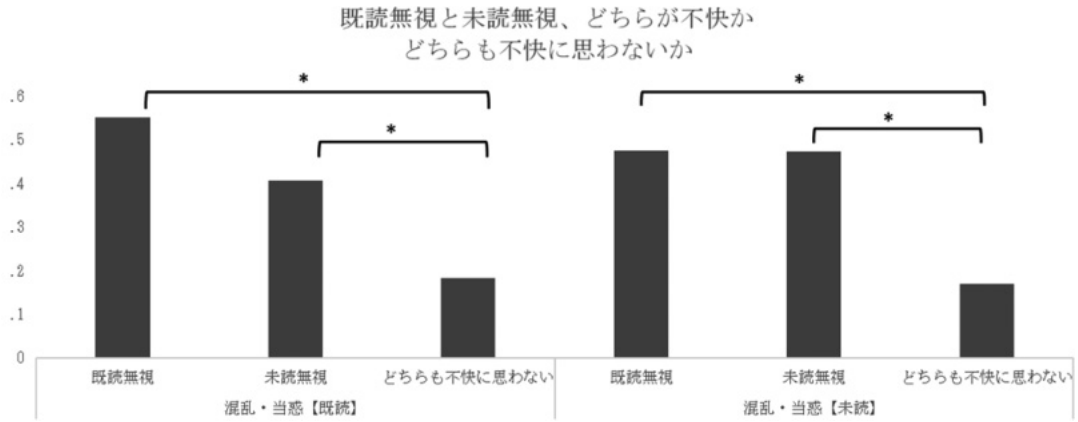
多重比較（Tukey法）を行った結果，「どちらも不快に思わない」と答えた回答者より，「既読無視をされたほうの方が不快」と答えた回答者のほうが有意水準5％で既読無視をされた際に感じるネガティブな感情の平均値が有意に高いこと，さらに「どちらも不快に思わない」に答えた回答者より，「未読無視をされたほうが不快」と答えた回答者のほうが有意水準5％で未読無視をされた際に感じる「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」の平均値が有意に高いことが明ら

かとなった（Figure 3， 4， 5， 6）。しかし，未読無視をされた際に感じる「緊張・不安」の平均値に関しては，未読無視をされた際の平均値よりも，既読無視をさ



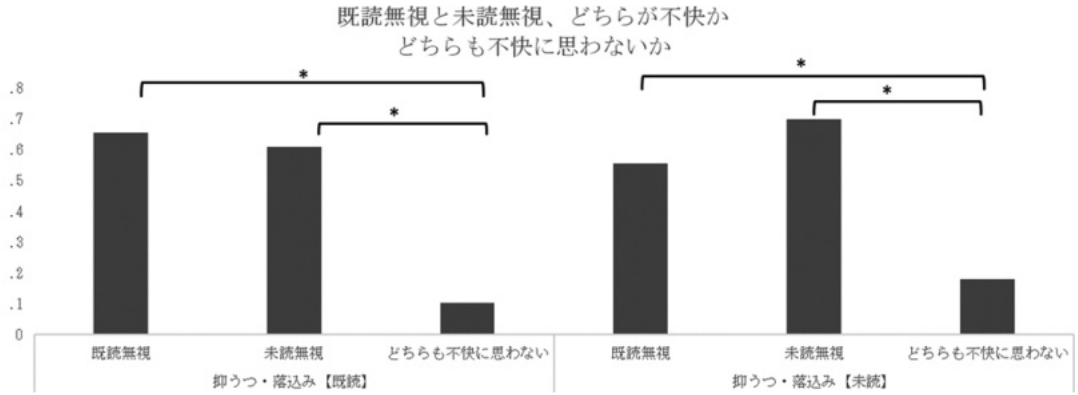
＊p＜.05

Figure 3　既読無視または未読無視をされた際に感じる「怒り・敵意」の平均値



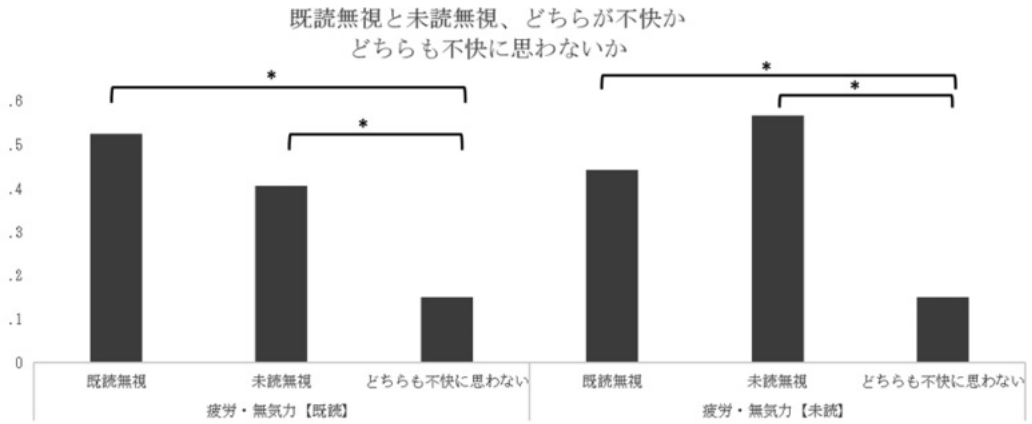
＊p＜.05

Figure 4　既読無視または未読無視をされた際に感じる「混乱・当惑」の平均値



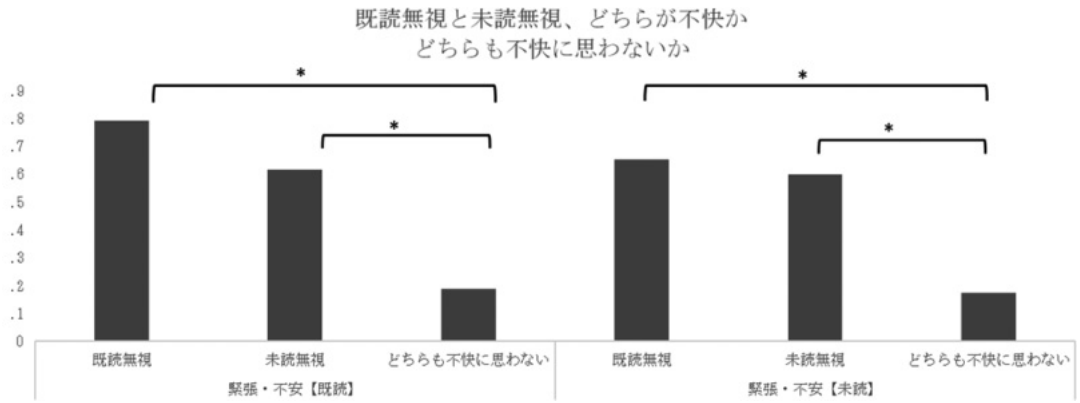
＊p＜.05

Figure 5　既読無視または未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」の平均値



＊$p<.05$

Figure 6　既読無視または未読無視をされた際に感じる「疲労・無気力」の平均値



＊$p<.05$

Figure 7　既読無視または未読無視をされた際に感じる「緊張・不安」の平均値

れた際の平均値の方が高かった（Figure 7）。

Ⅳ．考察

1．記述統計の結果について

スマートフォンの使用の有無について「持っている」と答えた回答者が94％を占めており，ほとんどの回答者がスマートフォンを所持していた。スマートフォンの使用開始時期についての結果により，全体の9割弱の回答者が中学，高校時代からスマートフォンを持っているということが明らかとなった。

LINEの使用開始時期についての結果により，全体の約9割の回答者が中学，高校時代からLINEを使用しているということが明らかとなった。

現在のLINEの使用頻度についての結果において，「四六時中」と答えた回答者は18％となっており，およそ10人に2人は四六時中使用しているということも推察される。

LINEの既読無視と未読無視の経験の有無についての結果により，約9割の回答者は既読無視，未読無視の両方された経験があることが明らかとなった。

LINEの既読無視と未読無視とではどちらが不快か，またどちらも不快に思わないかについての結果において「両方ともされた経験がある」と答えた回答者のうち，50%の回答者が「どちらも不快に思わない」ということが明らかとなったこと，約9割の回答者が中学，高校時代からLINEを使用していることから，使用時期の長さによる慣れである可能性が考えられる。

2．既読無視または未読無視をされた際に感じるPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」と内的作業モデル尺度とLove尺度との相関係数について

既読無視をされた際に感じる「緊張・不安」は内的作業モデル尺度の「アンビバレント型」因子とほぼ相関が認められなかった。既読無視をされた際に感じるその他のネガティブな感情因子と，内的作業モデル尺度のその他の因子と，Love尺度とでは有意な相関はみられなかった。

仮説で挙げたネガティブな感情の感じやすさと3つの愛着タイプとの関連は見られなかったことから，LINE既読無視，未読無視をされた際に感じる感情と愛着とは関連が見られないことが明らかとなった。

3．1要因の分散分析について

1）LINEの使用頻度による検討

多重比較を行った結果，未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」において，LINEの使用頻度の「四六時中」の得点が，「使用頻度最少群」の得点より，有意水準5％で有意に高いことが明らかとなった。

既読無視をされた際のネガティブな感情では差が見られず，未読無視をされた際のみで差が見られたことから，使用頻度による影響は未読無視をされた際の方があることが推測され，四六時中使用している人の方が未読無視をされた際に抑うつ気分になったり，疲労を感じやすくなったりしやすいことが示唆される。

2）既読無視と未読無視とではどちらがより不快かによる検討

「どちらも不快に思わない」と答えた回答者より，「既読無視をされたほうの方が不快」と答えた回答者のほうが有意水準5％でPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」が有意に高いこと，さらに「どちらも不快に思わない」に答えた回答者より，「未読無視をされたほうが不快」と答えた回答者のほうが有意水準5％でPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」が有意に高いことから，既読無視をされても未読無視をされても不快に思わない人よりも，既読無視または未読無視をされたほうが，不快と感じる人のほうがネガティブな感情になりやすいことが明らかとなった。

また，未読無視をされた際に感じる「緊張・不安」の平均値に関しては，未読無視をされた際の平均値よりも，既読無視をされた際の平均値の方が高かったことから，未読無視をされても既読無視の方が不快だと感じていることが考えられ，未読無視を

されたことによる不快感は少ないということが考えられる。

4．結論

女子大学生の約9割がスマートフォンを所持しており，スマートフォンの持ち始めた時期，LINEの使用開始時期は約9割の女子大学生は中学・高校時代からだということが明らかとなった。

LINEの使用頻度については「四六時中」「通知に気づいたとき」に使用している女子大学生が6割以上いることがわかり，使用頻度が高い女子大学生の方が多いことが明らかとなった。

LINE既読無視，未読無視の経験については約9割の女子大学生がどちらも経験していることが明らかとなり，既読無視，未読無視をされてもどちらも不快に思わないと答えた女子大学生が5割程度いることから，最大で5.6年程度使っている回答者がいると仮定すると，使用時期の長さによる慣れである可能性も考えられる。一方で既読無視をされた方が不快，未読無視をされた方が不快と回答した女子大学生もそれぞれ一定程度いることから，LINEによって無視をされることを不快に思う女子大学生もいることが推測される。未読無視をされた際に感じる「緊張・不安」の平均値に関しては，未読無視をされた際よりも既読無視をされた際のほうが，平均値が高く，未読無視をされても既読無視の方が不快だと感じていることが考えられ，未読無視をされたことによる不快感は少ないということが明らかとなった。

また，未読無視をされた際に感じる「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」の感情と，使用頻度「四六時中」「使用頻度最少群」とで，有意な差が見られ，使用頻度と未読無視をされた際に感じる感情との関連があることが明らかとなった。

「どちらも不快に思わない」と答えた回答者より，「既読無視をされたほうの方が不快」と答えた回答者のほうがPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」が有意に高いこと，さらに「どちらも不快に思わない」に答えた回答者より，「未読無視をされたほうが不快」と答えた回答者のほうがPOMS 2のネガティブな感情5因子「怒り・敵意」「混乱・当惑」「抑うつ・落込み」「疲労・無気力」「緊張・不安」が有意に高いことから，既読無視または未読無視をされても不快に思わない人よりも，既読無視もしくは未読無視されたほうが不快と感じる人のほうが，ネガティブな感情になりやすいことが明らかとなった。

未読無視をされた際に感じる「緊張・不安」の平均値に関しては，未読無視をされた際の平均値よりも，既読無視をされた際の平均値の方が高かったことから，未読無視をされても既読無視の方が不快だと感じていることが考えられ，未読無視をされたことによる不快感は少ないということが考えられる。

5．今後の課題

今回行った研究では，女子大学生のみを対象とし，男性に調査を行っていないため，LINE既読無視・未読無視をされた際に感じるネガティブな感情の感じやすさに関して男女に差があるかどうかは検討でき

ていない。今後は男性にも調査を行い，LINE既読無視・未読無視をされた際に感じるネガティブな感情について検討し，男女に差があるかどうか検討していく必要があると考えられる。

また，ネットいじめやグループ外しなどのLINEによるトラブルに巻き込まれやすいのは中学生や高校生などであることが考えられるため，中学生や高校生を対象とした研究を行っていく必要があると考えられる。

さらに，今回行った研究では，個人でのLINEのやりとりに限定して調査を行ったため，グループでのLINEのやりとりについても検討していき，個人でのやりとりとグループでのやりとりとでネガティブな感情の感じやすさに差があるかどうか検討していく必要があると考えられる。

引用・参考文献

Ainsworth, M. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

旭LINE同盟＆佐藤功（2015）．高校生が教える　先生・保護者のためのLINE教室，学事出版，12–23.

Bowlby, J. (1969). Attachment and loss, Vol 1: Attachment. New York: Basic Books.

Bowlby, J. (1973). Attachment and loss, Vol 2: Separation. New York: Basic Books.

Bowlby, J. (1980). Attachment and loss, Vol 3: Loss, sadness, and depression. New York: Basic Books.

藤原武弘・黒川正流・秋月左都士（1983）．日本語版Love–Liking尺度の検討　広島大学総合科学部紀要Ⅲ，7，265–273.

Hazan, C., & Shaver, P.R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511–524.

横山和仁監訳（2015）．POM 2®　日本語版（Profile of Mood States 2nd Edition; Heuchert, J.P., & McNair, D. M.）.

石川結貴（2016）．子どもとスマホ—おとなの知らない子どもの現実，花伝社，40–47，58–59，76–78.

加納寛子，西川純，藤川大祐（2016）．ネットいじめの構造と対処・予防，金子書房，30–33.

加藤由樹（2016）．既読無視と未読無視：LINE既読表示機能に関する基礎調査，相模女子大学メディア情報研究 2，17–32.

Main, M. (1990). Cross–cultural studies of attachment organization: Recent studies, changing methodologies, and the concept of conditional strategies. Human Development, 33, 48–61.

Main, M., & Goldwin, R. (1985–1999). Adult attachment scoring and classification system. Unpublished manual, Department of Psychology, University of Calfornia, Berkley.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the

level of representation. In I.Bretherton & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research, Monographs of the society for Research in child Development, 50（1-2, Serial No.209), 66-104.
文部科学省（2018).2017年度　児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査
日本弁護士連合会　子供の権利委員会（2018)．子供のいじめ問題ハンドブック　発見・対応から予防まで，明石書店，23-24.
Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. Journal of Personality and Social Psychology, 16, 265-273.
坂上裕子・菅沼真樹（2001)．愛着と情動制御-対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連，教育心理学研究，49，156-166
総務省（2015)．平成27年度　情報通信白書
総務省（2016)．平成28年度　情報通信白書
総務省（2017)．平成29年度　情報通信白書
総務省情報通信政策研究所（2017)．平成28年情報通信メディア利用時間と情報行動に関する報告書
特定非営利活動法人　子どもとメディア（2006)．子どものメディア接触と心身の発達に関わる調査・研究
吉田富二雄（2001)．人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」，サイエンス社，26-31，109-114.